

〈報告〉

「フクシマ」の問題

五十嵐 伸 治

【はじめに】

昨秋、「東洋大学東洋学研究所」から中国の内蒙古大学や内蒙古師範大学の先生方とのシンポジウムのパネリストと講演の依頼があった。東洋大学側から示されたことは、〈3・11東日本大震災以後、所謂フクシマの問題は深刻化の一途を辿り、放射能と核への懸念は独り日本国内にとどまらず、世界から注目される事態に立ち至った。ヒロシマ・ナガサキからフクシマへという課題は、今や既にグローバルな、地球的命題としての意味を帯びている〉という、フクシマ問題に焦点を絞ったものであり、かつ、〈フクシマの命題をグローバルな観点から創造的に捉え直し、提言することを目的とする〉という内容である。

そこで私の立場から、いくつかの文学作品を取り上げて、乱暴ではあるものの原子力発電の問題や核と放射能問題と「フクシマ」の問題を考えてみた。今年、一月二十八日に行われたその時の講演内容の一部をまとめ、以下に報告する。

I

東日本大震災は、青森・岩手・宮城・福島・茨城県沿岸に甚大な被害を与えた。なかでも、岩手や宮城や福島沿岸に押し寄せた巨大津波によって、三県で死者、行方不明者は二万人以上という自然災害では前代未聞の犠牲者が出た。こ

のような膨大な被害が出た東北三県の中で、福島だけに「フクシマ」と表示される言辭が付加された。それは、東京電力の福島第一原子力発電所で水素爆発事故が生じ、放射能が飛散したからに他ならない。

「福島」が「フクシマ」であることは、一九四五年九月に被爆地広島取材に来た英国の新聞記者ウィルフレッド・バーチエット (Wilfred Graham Burchett) が、記事の最後に記した (NO more Hiroshima) や、米国の作家ハーシー (John Hersey) の広島ルポルタージュに記述された (ノーモアヒロシマ) という言辭、及び大江健三郎の「ヒロシマ・ノート」(昭三八・一〇) (昭四〇・三) 『世界』に見られるように、「広島」で開催された原水爆禁止世界大会の国際会議で (ノーモアヒロシマ) と表現されたことと同じ意味を持つと言える。

しかし、「フクシマ」の表示は、果たして原子力爆弾によって未曾有の被害が出た「ヒロシマ」や「ナガサキ」と一括りにできるだろうか。東日本大震災以降に発表された数編の作品、及び福島在住の芥川賞受賞作家である玄侑宗久や詩人の和合亮一の作品にも触れて考察してみたい。

II

『文藝春秋』は、震災から一年後に「百人の作家の言葉」(平二四・三) という特集を組んだ。なかでも福島第一原子力発電所の事故に限った内容を見ると、ほとんどの作家が、核の平和利用としての原子力発電に対して異議を唱えている。特に、「祭りの場」で芥川賞を受賞した林京子は、十五歳の時に長崎で被曝し、その体験から自らの生の意義を問う直し、その心の軌跡を綴った作品を多く発表していることもあってか、福島第一原子力発電所の事故について、

原発事故のあと、「電力不足」ということで、計画停電が繰り返された。不自由ではあったが、豊かな現在を当然としてきた日常に、考える時を与えてくれた。今日の満足を求めていけば、電力は不足するだろう。原子力発電も必要になるだろう。しかし、メルトダウンにまで至った原発事故は、放射能物質と人間、生命との共存が不可能であることを、十分に教えてくれた。(略) 人が生きるための規範、国が国である規範、ぶれない唯一のものは、あるはず

である。ノーモアヒロシマからはじまった戦後の日本に、ノーモアフクシマが加わった。私たち大人は子供たちに詫びる言葉がない。

と、敏感に捉えている。私たちの電力に頼り切った日常生活のあり方の根本を見つめ直す機会であり、また（メルトダウンにまで至った原発事故は、放射能物質と人間、生命との共存が不可能であることを、十分に教えてくれた）と言い、（ノーモアヒロシマからはじまった戦後の日本に、ノーモアフクシマが加わった）と断言する。小林信彦も（地震国に原発は合わないし、狂気の沙汰である）と言い、村上龍は、次のように述べる。

エネルギー政策は根本から変えないといけない。反原発・脱原発か原発推進かといった議論そのものが意味をなさなくなった。もはや日本では原発推進はありえない。原発の事故はリスクが特定できないことがわかってしまったからだ。したがって、原子力行政は大きく変わらぬと思う。それが上手く新しいエネルギーにつながるかどうかは分からない。

誰の言葉だったか、実は安全や安心というものはない、というのがあった。安全は追求すべきだが、「絶対に安心」という社会はありえない。いつまたどこで地震が起きるかわからないし、ヒューマンエラーは起こる。

原子力発電について、『文藝春秋』に掲載された多くの作家の見解は、林京子が（放射能物質と人間、生命との共存が不可能である）と言った内容で一括りに出来ると言える。また、天災と人災という二重の災害の中で、福島第一原子力発電所の事故は人災であり、村上龍の言う（ヒューマンエラー）でもある。

若杉冽の「原発ホワイトアウト」（平二四・六 徳間書店）やその続編とも言える「東京ブラックアウト」（平二六・一二 講談社）には、政府が推し進めるエネルギー政策の戦略的な背景の中で、出世を狙う高級官僚のエゴが様々に交錯し、揺れ動く心情が描かれる。経済界をも巻き込み国家権力の中に蠢く野心家の私利私欲に満ち、錯綜したむき出しの感情や原子力規制委員会の闇の世界を描出しながら、テロや自然災害と言った複合的な状況を織り込み、原子力発電事故が起こりえる危険性を指摘している。そこには単なる（ヒューマンエラー）の問題だけではなく、人倫の問題も組み込まれている。

「東京ブラックアウト」は、送電線爆破テロによって大規模停電となり、〈新潟県〉（新潟を想定）の原子力発電所の原子炉冷却装置も稼働しなくなり、また、大雪によって非常用発電機も作動しないという複合的な原因によって、福島第一原子力発電所の事故同様、メルトダウンが生じ、首都東京が完全に放射能汚染に見舞われるという内容である。これら若杉の作品は、東日本大震災以後の発表であるが、自然災害である津浪が大雪という気象条件に転化され、加えてテロ攻撃という最悪の条件が組み込まれており、そういった外的な破壊の他に原子力発電所設置に関与する人間の欲望の利害得失の絡みも考えると、原子力発電には限りない危険性が孕んでいることが読み取れる。

また、麻生幾は「前へ！ 東日本大震災と戦った無名戦士たちの記録」（平二三・八 新潮社）の中で、第一章が福島原発事故対応、第二章が津波被害地での救助活動、第三章が内閣府の初動対応と対策について、現場取材を中心に、最悪のシナリオにならないように命をかけて災害対策に奮闘した人たちのことをノンフィクションの形式で描いている。麻生は、被災した各々現場の多くは、マニュアル化された災害対策では対応できなかったことを取り上げ、最後に、〈危機管理において、最大のリソースは、やはり『人』であることをあらためて確信しました〉と言ったDMAT（災害派遣医療チーム）事務局長の言葉を添えている。

これは災害現場で一番大切なことは、災害想定に対応マニュアルより、その災害状況を目の当たりにした人間の蓄積された体験から育まれた洞察力と判断力、そして、その体験から育まれた知力と、次に何が起こり得るかという予測する能力が大事であり、実行する勇気だと実感したからだと言える。事故対策のあり方を一歩誤れば、東北や関東一円が放射能汚染に見舞われ、浪江や双葉、富岡、大熊町、飯館村等の九市町村の人々同様、自宅を捨てて避難しなければならなかったことを私たちは認識し、理解しなくてはならない。

囲碁棋士のマイケル・レドモンドは島田雅彦が司会した座談会で〈三十五年ほど日本で生活していますけど、原発がコントロールできなくなる事態はよその国のことで、日本は安全基準が高いし技術力もあるので、そんなのは（福島原発事故）あり得ない、という思い込みがありました。それだけにショックでした〉という感想を述べている。このような思い込みは、当然、日本で生活する私たちの意識の根底にもあったものである。福島第一原子力発電所の事故から六

年という時間の経過と共に、記憶の風化という麻痺しつつある感覚を振り払い、原子力発電所が再稼働しつつある現在、政府や原子力安全委員会や電力会社の安全神話に振り回されないよう、原子力発電の事故は、当然起り得るという認識をあらためて再確認しなければならない。

また、時代小説「髪結い伊三次捕物余話」シリーズを書いた宇江佐真理は、自然災害だけなら甦る力があるものの、原子力発電事故問題については、政府が報告する収束や復旧のあり方に疑問を示している。宇江佐はこの事だけではなく、福島原発の事故で被害に遭われた人々の気持ちを汲んで、〈福島第一原発は東京に、より多くの電力を供給するために設けられた。東京に住む人々は特にこのことを肝に銘じてほしい。他人事と思ってはならないのだ〉と言う。これは、東京を中心とする関東大都市圏に住む人々の犠牲者が、福島という生活地、故郷から追い出された人々であるということにもなる。原発事故のために、福島から横浜に避難した小学生に対する暴言やいじめの問題は、この宇江佐の言葉をしつかりと受け止めていれば生じなかつたかもしれない。

III

次に、世界で唯一の被爆国である日本における原子力の平和利用への移行について、簡単に述べよう。

太平洋戦争中、陸軍の理化学研究所で主任として招聘され、そこで原子爆弾の研究をしていた核・原子物理学者の仁科芳雄は、雑誌『世界』（昭二一・二）の中で「原子力問題」と題して、一九四六年にロンドンで開かれた国際連合総会で原子力の国際管理について、原子力委員会が設置された内容を踏まえ、その後の経過を説明している。原子力の管理を国際的に規定し、原子爆弾の使用を禁止する必要性を述べ、戦争は〈科学の進歩によって殺戮量は大きくなり、原子爆弾の出現によって遂にその極に達した〉と述べ、〈人類は今や原子爆弾を前にして破滅か平和の帰路に立っている〉と言う。国際連合に進言する委員会の〈原子力を管理しその使用範囲を平和目的のみに制限すること〉を中心とする内容の全十四項目の中の「六 危険にあらざる活動」に示された〈原子力により平和的福祉を増進するにある〉という

部分を取り上げ、仁科は、「原子力の将来」として、原子力エネルギーに焦点を絞り、アメリカの原子力研究者コンプトン博士の説を引用し、次のように述べている。

しからば原子動力はどうして得られるかといえ、原子力発生装置に於いてエネルギーは熱の形として出てくるから、これによって先ず空気を熱し、その空気によってボイラーを沸かし、得られる水蒸気を用いて動力を起すことは普通の通りである。然らばこの場合の操作の安全度はどうであろうか。人はすぐ原子爆弾を聯想して危険を感じるかもしれないが、原子力を爆弾として用いるには特別の手段を必要とするものであつて、爆発させることの方が困難なのであるから、この心配は無用である。ボイラーの危険性は普通の工場と同様である。それよりも危険なのは前述の放射能であつて、これは発生装置からも、それから取り出す物質も多量に放射せられ人体に危害を及ぼすものである。これには充分の注意を払わねばならぬが、現在原子爆弾の製造工場ではこの害を防ぐことが知られているから、それと同様の措置を講ずれば好い。(『世界』主要論文選) 平七・十 岩波書店 引用)

原子力爆弾の危険性を踏まえながら、(平和的福祉を増進する)ことを提案する立場ではあるものの、原子力エネルギーに関する内容は非常におおざなりで、原子力は、爆発させるわけではなく熱エネルギーとして活用するのであるから安心であると言ひ、放射能は危険だが、既にアメリカの施設で行つてゐる措置を真似れば良いとまで言ひ切つてゐる。

同じく、戦中は陸軍技術大尉で応用化学研究の専門家であつた吉村昌光は、雑誌『中央公論』(昭二九・六)の中で「原子力豫算の使い方」と題し、「原子力時代の夜明け」として、火力発電に使用する石炭が高価につくから、(化学燃料は化学原料として、誤つて用いられた原爆は本来の原子燃料として、正しく使い分けることが、科學者のねがう人類幸福への方法論である)と前置きし、(原子力発電といつても火力発電のことであり、石炭ボイラーの代りに、原子ボイラーが使われるだけのこと、発生した蒸気でタービンを廻し、発電機を動かして発電する段取りには、少しも變りがない)と断言している。電力コストの問題点を指摘しつつ、仁科と同様に原子力の発電事業に積極的な姿勢を見せている。この吉村の発言は、アメリカの原水爆実験が科学的観測地点のビキニ環礁で実施され、日本の漁船、第五福竜丸が被爆し、乗組員が死傷し、捕獲したマグロからも強い放射能が検出され、魚介への残留放射能の警戒心が国民にも広

がり、魚介類の不買、敬遠といった風評のみならず、「死の灰」という言葉も広まりはじめていた時のことである。

この『中央公論』には、インドのネール首相の「水爆実験禁止協定を締結せよ」といった声明も記載されており、南太平洋フランス領ポリネシアのムルロア環礁でのフランスの大気圏内核実験問題と合わせて、日本の社会動向は、翌年の八月、広島で原水爆禁止世界大会を開催する方向へ舵をとることになる。

一九五四年三月のアメリカのビキニ環礁水爆実験に対する、ネール・インド首相の水爆実験禁止声明やイギリスのアトリー労働党党首の水素爆弾の管理問題と軍備の縮小の呼びかけが、日本の市民運動の契機になったとも言える。一九五七年に政府は、国会審議を経て、「非核三原則」の骨子を表明したが、その内容は、原子爆弾禁止が主で、「原子力問題」、放射能問題は、残念ながら蚊帳の外という内容だった。

IV

大江健三郎は、一九六三年に開催された第九回原水爆禁止世界大会に初参加し、以降、広島を訪れ、「ヒロシマ・ノート」という記録文学を著したが、その中で、

放射能によって細胞を破壊され、それが遺伝子を左右するとき、明日の人類は、すでに人間でない、なにか異様なものでありうるはずである。それこそが、もつとも暗黒な、もつと恐ろしい世界の終焉の光景ではないか。そして広島で二十年前におこなわれたのは、現実には、われわれの文明が、もう人類と呼ぶことのできないまでに血と細胞の荒廃した種族によってしか継承されない、真の世界の終焉の最初の兆候であるかもしれないところの、絶対的な恐怖にみちた大殺戮だったのである。広島島の暗闇にひそむ、もつとも恐ろしい巨大なものとは、すなわちその可能性にほかならないだろう。

と、原子爆弾のみならず放射能が人類に及ぼす危険性と恐怖を訴えている。大江は、実際、多くの人から話を伺い、多くの被曝者に会い、この記録をまとめあげた。〈ヒロシマ〉は、人類にとって歴史の記憶に留めておかなければなら

ない場所であると言うことになるか。戦争とは言え（ヒロシマ・ナガサキ）は、人類未曾有の原子力爆弾の被曝地という受難、惨禍を受け、世界に類を見ない無慈悲な大量殺戮の地であり、原爆病という放射能による晩発性障害も起こしてしまつた地であることも大江は、書きとめている。

続いて、広島に関する原爆文学は、峠三吉や原民喜、大田洋子をはじめ小説や詩や短歌、随筆も含めて多くあるが、黒古一夫が（被爆者の悲しみを静かに訴えかける名作）と賞する井伏鱒二の「黒い雨」について考えてみる。

一九六五年一月「姪の結婚」として『新潮』に連載され、後に改稿された井伏鱒二の「黒い雨」に関して言えば、モデルとなる重松静馬の「被爆日記」が基盤にあるというのは周知の事実だが、井伏は、「黒い雨」を執筆する上で、小説を書くように空想では描けないから、色々資料を熊手で集めるように掻き集めたと言ひ、被爆者やその看護に当たつた人々にも会い、極力事実を尊重してルポルタージュとして、記録者たることに徹しようとしたという。この井伏の執筆の姿勢は、大江と同じように事実をできる限り歴史に留め、人類を破滅させるかもしれない原水爆や放射能の恐ろしさを多くの読者に提言するための方法だつたと言える。

また、井伏は、一九八六年四月二十六日のソ連のウクライナ共和国チェルノブイリ原発事故について、「原発事故のこと」（昭六・一・七『新潮』）と題して、戦友の松本直治の息子が、原子力発電所で働いて被曝してしまい、舌がんで死亡したことを告発するかのよう上梓した「原発死」の遺恨の手記を取り上げながら、（原子力発電所は、その後ますます増設され、次々と日本列島を汚染の渦に巻き込んでみると私は思つてゐる。そのことは、かつて戦争の発音が国民の上に暗く覆ひかぶさつた暗い過去の想ひに繋がるのだが、一般にはその原発の持つ恐怖が以外と知られてゐない。あたかも戦争への道が、何も知らされていなくうちにでき上つて行つたやうに―）と書き、（恐るべき原発はこの地上から取り去つてしまはなくてはいけない）と断言している。

このチェルノブイリ原発事故は、大量殺戮に繋がる兵器ではなく、（平和的福祉を増進する）国家経済戦略としての原子力発電だつたわけで、核爆発によつて高濃度の放射能が大気中に飛散し、十万人以上が他所への移住を余儀なくされたことは、世界の人々を震撼させた。日本では、六月に井伏鱒二や大江健三郎、大岡昇平等四百名ほどの文化人が世

論に原発停止の必要性を訴えた。

戦後、産業は、敗戦後の疲弊した日本国家の経済の立て直しを迫られて、新たなエネルギー源の開発に乗り出した。特に、電力の必要性から原子力産業が中心となり、〈平和的福祉を増進する〉目的で、新たな原子力エネルギーの開発研究に取り組み、政府は、放射能が及ぼすあらゆる問題に蓋をして、原子力エネルギー政策を押し出して、環境に優しいクリーンさや利便性と安全性を唱え、平和利用へとシフトを切り替えた。それに反して、作家や哲学者たちは、「ノーモアヒロシマ」や「ノーモアナガサキ」を唱え、原爆、核の脅威を語り続け、この二つの対立する考え方が日本の核問題を主にリードしてきたとも言える。

V

次に、戦後生まれの田口ランディと真山仁という作風の異なる作家の作品から、原爆や放射能の問題をどのようにとらえられているのかを考察してみる。

はじめに、インターネット上でコラムマガジンを配信し、幅広い読者層を持つ田口ランディの作品から「被爆のマリア」(平一七・八〇一一 『文學界』 単行本 文藝春秋社 平一八・五) に収録された二作品について、取り上げる。

「永遠の火」は、三十八歳にして結婚する主人公、私・山本佳代子の結婚式でキャンドルサービスをする際使用する火を、広島島の〈原爆の火〉にしようという七十二歳の戦争を体験した父親の着想に対して、佳代子が猛反対するところから始まる。

平和とか、戦争反対とか、原爆とか、そういう強くて正しい社会的なことに、私の人生は一切関係なくこれまできた。修学旅行に広島に行ったけど何を見たかも覚えていない。私はそういうパンピーな女なのだ。募金だつてしたことはない。せいぜい赤い羽根をしぶしぶ買うくらいだ。そんな私が結婚式にいきなり平和を祈る人になれるか。無理だ。まして原爆の火を灯し続けるなんてガラじゃない。考えただけで怖くなる。私は身震いした。とにかくごめんだ。

キャンドルサービスが原爆の火というのは私の平凡な人生に似つかわしくない。平和は大切だが世界平和よりも自分の平和である。

その佳代子が、先祖の墓を詣でて「死という未来の前に、ごまかしはききようもなく、私も何かを求めるかもしれない。ほしいのは神でもなく、愛でもない。それでも祈るべきものを求めるかもしれない。そのようなときになって初めて、死んでいった人たちの悲しみに慰められるのかもしれない」と、自分のなかの変化に気づく。戦後生まれの、広島から遠く離れた東京で生まれ育った主人公は、「平和とか、戦争反対とか、原爆とか、そういう強くて正しい社会的なことに、私の人生は一切関係なくこれまでできた」のであり、今、現在こそが自分の人生にとって大事であり、自分の人生の平和とそして未来が大切だと考える。戦後の高度経済成長に支えられ、これといって不自由なく生活してきた主人公にとって、過去の歴史は、知識としてはあるものの、今の自分の人生に全く関係のないことである。しかし、父親が提示した〈原爆の火〉を媒介にして、主人公の意識は、今の自分の人生が、遠い過去の歴史との繋がりがあったからだと感じ始め、徐々に過去に亡くなった人たちの悲しみにすり寄って行く。

「時の川」は、広島平和記念資料館や平和公園周辺が舞台となっている。四歳の時に小児ガンに冒され、抗ガン剤投与と放射線治療による被曝で発育が遅れた主人公・タカオは、広島修学旅行中に二十歳で被曝し、何度も甲状腺ガンを併発しながら語り部を続ける八十歳のミッコと出会い、ミッコの逞しい生命力に驚き、「人間として勝ち残った人だ」と実感する。末期の肝臓ガンで死んだ父親と比較しながら、「生命力とはうまれつきのもものだ。強い人間は何がある」と長生きする。原爆を浴びてすら」と思う。ミッコは、語り部として、話をしているうちに「声高に平和について叫ぶうちに、いつしか強い自分になっていたかもしれない」と振り返る。

この作品では、タカオもミッコも共に過去を引きずって、現在に不安を感じている存在として描かれている。影の薄い不安な未来に目は向いていない。しかし、広島で被爆体験のあるミッコは、タカオと出会ったことで現在と未来を見つめ、戦後から大きく時間がたった後の平和な時代に生まれたタカオは、ミッコの生命力を感じて未来に目を向け始める。

田口ランディは、取材で広島に何度も足を運んでいる。戦後生まれで平和な社会で育った田口にしてみれば、広島の問題は、実際に過去の風景を見つめ、記憶に留めながら想像し、それらを取材した事実と文章に昇華させる作業が必要になる。

「永遠の火」も「時の川」も、過去の歴史的事実と自己を見つめる現在と未来への不確かな希望という時間の流れを意識しながら描かれたと言える。大江健三郎や井伏鱒二とは異なった立脚点で広島問題を見つめ、原水爆や放射能の危険すべき問題を過去の出来事ではなく、現在も、いや未来にまでずっと継続して記憶し、語るべき事だと田口は静謐に受けとめている。

企業買収など国内外の投資ファンドの世界を描いた作品が多いエンターテインメント小説家、真山仁は、「マグマ」(平一八・一朝日新聞社)において、先進国エネルギー問題会議上で、「日本は世界で唯一原爆を落とされた国」だから、日本の原発の閉鎖が国際世論に対する原発建設抑止に繋がると要求されたところから物語を始める。内部告発によって、「東都電力」の原発の管理体制の杜撰さが公になり、世論の原発バッシングが続いていた最中のことと設定され、投資会社の野上妙子が主人公となり、原発代替エネルギーとして九州にある地熱発電の再建を図るというものである。

この作品で真山は、「日本における原子力発電推進は、利権構造と権力構造が生んだ悪魔の選択」であり、「日本が核を有することは、先進国の仲間入りをするために絶対条件だった」と原子力産業の構造を描く。また、「経済的精神的文化的余裕のない国は原発を持つべからず」で、成長著しいアジア諸国の原発ラッシュを警告する。また物語では、日本でも原発事故やトラブル隠しが発覚しても(政府も電力会社も)、(日本を代表する原子力企業のいずれもが問題の解明も責任の追及もしない)無責任なさを示し、日本の原発の危険性を描きながら、新しいエネルギーとして、「電力界の負け犬」と揶揄される今にも破綻しそうな地熱発電所を取り上げ、その具体化に向けて、人々が様々な事を乗り越えていく姿を描く。

また、「ベイジン 上・下」(平二〇・七 東洋経済新報社)でも真山は、中国北京で開催されるオリンピックを背景に、大連郊外に建設する世界最大の(紅陽原子力発電所)建設を中心に物語を始める。そこには日本の原子力発電開発

の技術力を買われ、技術顧問として工事のリーダーとして着任した田嶋伸悟の苦悶と苦闘が描かれる。

中国国家中枢の共産党政治勢力や企業集団等の利害確執も含め、天安門事件の問題も引きずりながら、また、工事に関わる中国人作業員の安全性の精度に対する気質の低さも加えて、不安要素を抱えながら工事が進捗する。〈原発に絶対はない〉、〈あり得ない事が起きるのが世の常〉であると考えるゆえに、工事の進捗に細心の注意を払う田島も、現状の工事のままでは事故が起こる可能性も否定できない不安を抱えたまま、原子力発電所の運転開始に漕ぎつける。しかし、ステーションブラックアウト（全交流電源喪失）が生じて、暴走する核燃料を冷却できない状況になり、福島第一原発同様の事故が起こるといふものである。

この二作品は、福島第一原子力発電所の事故が起こる前に書かれていたことに一種の驚きを感じる。原子力発電所の事故が起こりえる原因は、自然災害だけではない。作品には、原子力発電を巡る様々な産業の社会構図やそれに関わる人間模様が描かれ、そこから生まれるヒューマンエラーといった歪みを指摘して、原子力発電の安全神話を真つ向から否定する。地震列島に設置される原子力発電所の危険性は、政府や原子力規制委員会の数的判断だけでは拭いきれない問題が山積みされている。

昨年、夏に鹿児島県の三反園訓知事は、原子力災害対策特別措置法を取り上げて、〈生命、身体及び財産を災害から保護する〉必要上、施設設備等の再検証及び事故が起きた場合の住民の避難計画の実効性も含め、安全性を確認するよう川内原発の停止を申し入れた。原発事故が生じた場合の避難計画の難しさは、若杉例の「東京ブラックアウト」に描かれている。また、原子力発電所の事故は、建設の工事上の技術的な問題だけではなく、政界と官僚レベルの私欲望の攻防やそれらに関与する人間の内在するモラルも含めて、様々なヒューマンエラーが生じるリスクはあるわけで、〈原発に絶対はない〉と真山は断言し、事故の起こりえる可能性の高いことや危険性を既に指摘していた。

田口ランディは、現在の日常性に広島島の原爆に関する問題を取りいれて作品を描いた。そこには過去の歴史上の出来事が、現在においても様々な問題事項として浮かび上がっており、作品背景に〈ノーモアヒロシマ〉があるのは理解できる。真山仁や先の若杉例は、原子力発電の事故発生率の可能性と危惧を正面から問題として取り上げ、技術的なこと

ばかりではなく、原子力発電所建設をめぐる様々な国家戦略を含めた人間のエゴも描いて、事故発生の可能性を警告し、示唆する。

しかし、田口や真山、若杉の作品には、放射能に関する問題が取り上げられてはいるものの、原爆文学といった分野とは一線を画すと言える。文学における〈ヒロシマ〉・〈ナガサキ〉という言葉には、戦争とは言え、原爆が投下されて前代未聞の歴史上最悪の大量殺戮が行われ、放射能によって原爆病に苦しむ人々を陥れた特定のエリアといった意味が含まれており、当然、〈ノーモア〉といった言葉が付随する。つまり、戦中戦後を生き抜いた大江健三郎や井伏鱒二や林京子などのように反戦・反核・原水禁という批判上の信念が明瞭で、思想上の特定の意味があると思われる。

これは、一九八五年の夏の『解釈と鑑賞』（至文堂）で、中野孝次と長岡弘芳が原爆文学について対談していた内容と関係する。中野は、原爆文学の世代を二つに分けて、既に成人にいたって広島や長崎の原子爆弾を体験した世代と、幼年少年期に体験した世代に分け、長岡はそれに〈被爆体験を何等かの形でもつ人たちと、被爆しないで、その問題性ゆえに原爆とかかわった人たち〉を追加して、互いに原爆文学について対談をしている。この見解に、新たに、田口ランディや真山仁といった戦後生まれの第三、第四世代の作家が、どのような形で広島、長崎の原爆問題を取り上げ、どのように語るのか加わると言える。

VI

次に、東日本大震災・福島第一原子力発電所の爆発事故以後に発表された数編の作品を取り上げ、原子力発電のあり方について、どのように触れているのかを述べる。

はじめに村田喜代子の「光線」（平二三・一〇『文学界』 単行本 文藝春秋社 平二四・七）についてだが、作者は文春文庫の（あとがき）で、東日本大震災の一月前に子宮体ガンにかかり、福島第一原爆事故の最中、四月末から約一ヶ月ほど後遺症の憂えない放射線四次元ピンポイント治療を鹿児島の治療施設でうけたと言う。その後、〈ガンが

消えた後の私が書くべきものは、原発と放射線治療という奇妙な取り合わせしかなかった。その頃、鹿児島県の桜島は年間の観測史上最高となる爆発回数を記録し、私が滞在中の四月と五月の噴火は百六十八回を数えた。市内には黒い灰が臭気を伴って降り積んでいた。地球の深部は放射性元素の崩壊が行われている。核分裂の火が燃えているのだ。人間世界の動きから眼を空に移すと、太陽は核融合する巨大な裸の原子炉だ。そして地上では人間の手で造られた福島原発の炉に一大事が起こっている。私が鹿児島県の舞鶴町で日々めぐらせた思いは、これもまた一つの3・11に続く体験というしかない。原発への恐怖と、放射線治療の恩恵と、太陽を燃やし地球を鳴動させる巨きな世界への驚異である」と執筆の意図を書きとめている。

作品は、悪性度の高い子宮体ガンになり、放射線治療に耐える妻の状況が、夫、秋山（定年退職後の再雇用会社社員）の視点で描かれる。放射線と言えば、広島、長崎の原子爆弾のことが想起されて、被爆という恐怖や不安といったイメージが起こる。治療用放射線と放射能は異なるものの、放射能は被曝すれば、生命の危険性が一生付きまとうが、治療用放射線は、身体に果食うガンの細胞を死滅させて生命を獲得する手段のひとつである。放射線治療に成功した作者にとつて、福島原発事故の放射能問題は、リアルタイムで「奇妙な取り合わせ」であり、因縁めいた課題としてあつたと思われる。

〈核融合する巨大な裸の原子炉〉である太陽の下で、〈地球の深部は放射性元素の崩壊が行われ〉、〈核分裂の火が燃えて〉桜島が噴火し、亜硫酸ガスの酸性に似た異臭と黒い灰が降る見知らぬ街の中で、放射能とは異なるものの医学治療に施される放射線を受け、生への期待と放射線治療の後遺症に不安を抱える妻の孤独感を静かに見守る夫は、東日本大震災の津浪の被害状況や「人間の手で造られた福島原発」事故のテレビ映像を重ね合わせ、「自分の家の出来事と同時進行」で「厄災」が起こっていることに言うに言えない複雑な心境に陥る。

作者は、大自然の核分裂現象は、地球において必要欠くべからざるものであるが、人工的に造られた原子爆弾や原子力発電事故は、「厄災」を生むものであると暗示する。また、偶然または突然に生じた個人の「厄災」と東日本大震災や福島原発事故によって多くの人が「厄災」を受けたことを比較しながら、どちらにしても結局、「人間は一人」とし

て、〈厄災〉を受けた妻、本人（一人称）の寂寥と孤独感を取り上げ、夫といった二人称以上の他者には、分からない複雑で繊細な感情の起伏を、作品の上で示している。確かに、メディアを通じて被災地の状況が様々な方法で報道されているが、結局、被災者以外の他者が表面的なことを理解するだけであって、東日本大震災や福島原発事故で〈厄災〉を受けた人々の本当の苦しみというものは、実際には、当の一人称である本人しか分らないことなのだ。

福井晴敏の「震災後」（平二三・一一 小学館 初出『週刊ポスト』平二三・六・一三―一・一一）は、震災後の初秋、野田圭介の息子、弘人がインターネット上に〈フクシマベイビー〉として画像処理した奇形児の写真を公開した仲間の一人として発覚し、在籍する中学校で〈震災以来、大人社会に不審を抱き、ついにはこんな事件を起こしてしまった子供たちに、地域の大人たちから希望を与える言葉〉という趣旨でPTA主催の臨時集会が開催されている状況から始まり、そして一転して三月十一日にストーリーは戻り、この集会に至るまでの野田の家に起こった様々な出来事が描かれる。

福島原子力発電所の事故によって放射能汚染の様々な情報が流れるなか、圭介は〈自分や家族の生命を脅かすもの〉に對峙し、対応に葛藤するなかで、弘人の〈フクシマベイビー〉の問題が起きる。大人社会のうわべだけの、その場しのぎのやり方に対して〈未来を返せ〉と叫ぶ弘人に返す言葉を失う圭介は、同居する元防衛庁の幹部で退官した父の〈脱原発を反戦と同じ棚に置いてはいかん〉、〈この地震大国で、原発を運用するのはリスクが大きすぎる。今回の震災で得た、それが最大の教訓だとわしは思う。だが、だからと言って感情的に脱原発を唱えれば、安保闘争の二の舞になる。感情では現実には勝てん。現実を動かすのは意志の力だ。強い意志こそ未来を引き寄せ、この国に巣くった『闇』を払う〉、〈犠牲から何も学ばなかった復興など無意味だ〉といったアドバイスに触発され、『闇』と言う不確かな社会で、きつと誰かがしてくれるという〈無辜の民〉ではいけないと感じる。

この〈無辜の民〉の問題は、今の日本社会の本質を突いている。前出の田口ランディの「永遠の火」の主人公、山本佳代子の立場がそうであったように、現在において何不自由しない現代社会で成長した人々には、現政権が巻き起こす様々な国家戦略上の危惧されるべき問題が生じてても、対岸の火事同様に、自分が行動を起こさなくても、誰かがして

くれるという他人依存型で、一種の事なかれ主義の自分本位といった樂觀傾向の雰囲気がある。東日本大震災に関わる様々な怪情報が飛び交った中、作品の〈フクシマベイビー〉といった誤った情報も混在し、多様化する情報化社会でこそ、〈意志の力〉、〈強い意志〉を持って、各自が現実をしつかりと認識する必要性があることを作者は示していると言える。東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故によって生じた問題を、「闇」の蔓延る国政が、再び「闇」に葬らせようとさせないためには、国民たる一人一人が〈強い意志〉を持って目を向け、監視することが大切だと言っているのである。また、〈地震国で、原発を運用するのはリスクが大きすぎる〉と言い、原発事故の問題は、国家戦略の犠牲者とも言える被災した当事者だけの問題ではなく、国民一人一人が未来に向けて各自が真摯に捉えるべきではないかという警鐘を示している。

「贗作坊ちゃん殺人事件」や「はじまりの島」といったミステリー小説を書いた柳広司は、福島第一原子力発電所の事故を題材に「黒塚」（平二七・七『オール讀物』）を書いた。

「黒塚」は、町の青年団員の阿佐利慶祐が主人公である。慶祐は、東日本大震災の津波被害に遭った町民の避難活動に追われていた翌日、福島第一原発が爆発したことを知らされる。避難勧告に従って、その場所を追われるように逃出すしかなかった慶祐は、津波で瓦礫のなかに生存者がいるかもしれないと思いつつ、見捨てていくようにその場を去らなければならなかった。不快な倫理観に苛まれつつ、どうにもならない憤りをのみ込みながら安全圏と言われた地域まで避難をする。〈原発は絶対安全な〉、〈原発は原爆じゃないから、何があっても爆発なんかしません〉という安全神話が完全に崩れ、放射能という見えない怪物のような物質に不安と恐怖を感じながら慶祐は、東京の大学で物理学を専攻し、大学院を中退した田辺陽一郎と一緒に三〇キロ圏外まで逃れる。しかし、地形と風の流れが影響し、陽一郎が持参してきた線量計は強い放射線量を示す。

この作品は、能の「黒塚」が基軸として織り込まれている。能の「黒塚」は、紀州の祐慶という僧が旅の途中、安達ヶ原で老婆の住む岩屋を宿として求める。老婆が外に出た隙に、見てはならないと言われた部屋の内側に白骨化した死体が山のように積み上げられているのを発見し、人を殺めては人肉を食う鬼婆伝説を思い出し、驚愕のあまり逃げ出す

が、鬼女がどこまでも追いかけてくる恐怖に苛まれながら、仏法によってその鬼婆を退治するという話である。

主人公の阿佐利慶祐の名は、鬼婆伝説の僧、祐慶の名前と反転であることから分かるように、原発事故によって飛散した恐ろしい放射能という鬼婆同等の怪物が、逃げる慶祐たちをどこまでも追いかける様子は、鬼婆から逃げる僧、祐慶と相似する。人を襲い、死にまで陥れる放射能から逃れられない恐怖は、救済を求めようもなく、ただ〈タスケテ〉と暗闇の中から救助を求めながらも見捨てられた女の声と重層化したかたちで描かれる。また、放射能の恐怖のみならず、暗闇から聞こえる〈タスケテ〉という微かな悲痛にも似た叫びは、原発事故によって日常生活の場や故郷をはぎ取られ、非難せざる得ない人々のどこにもやり場のない悲痛な叫びにも聞こえる。

VII

最後に、「中陰の花」で芥川賞を受賞した福島県在住の作家、玄侑宗久の「光の山」と「桃太郎のユウウツ」及び、同じく福島県で高等学校の国語教師をする傍ら、様々な活動をしている詩人、和合亮一 の作品を取り上げる。

「光の山」(平二四・三 『文藝春秋』)は、震災が起こり原発事故もあり、東京大震災も起こり、富士山も爆発し、東京にすむ人も少なくなった(今から三十年まえ)、福島の前田舎で生活していた父親の不可思議な行為と放射能汚染廃棄物の山が〈光の山〉と神格化した経緯について、その息子が〈ホーシャノーツアー〉にやってきた人たちに物語るという構図になっている。

原発事故後の放射能飛散を過剰に恐れて人口流出が起こったことや、〈汚染〉や〈除染〉という言葉の内に孕む〈被曝〉という問題にも触れつつ、日常生活では野菜等の放射線除菌や医療のCTスキャンでも6・9mSvの被曝をすることから、これらも〈汚染〉なのかと訝りながら、父親は〈ホーシャノール〉に汚染された廃棄物を〈大丈夫、大丈夫〉と言ひ、広大な自分の敷地内に運び入れることを許したという。その汚染物で積み上げられた山から、三年間でチェルノブイリ原発事故が起こったベラルーシと同じ毎時10μSvを超す〈ホーシャノール〉が測定される。放射能に汚染され

た廃棄物を一手に引き受けて巨大な山になった側で生活しても父親も母親もその後、ガンにも罹ることなく、長寿を全うして死んだ。父の死後、山で茶毘に付した後、山が燃え、この世のものとは思えない美しさに変容し、神格化した山の放射能を浴びるために人々が集まってくるという奇想天外な話である。

臨済宗妙心寺派の僧侶である作者が、宗教上の様々な経験を踏まえ、対談集や随筆にも見られる禅の心構えのようなことがこの作品の表裏に複雑に織り込んで描かれているのだろうが、この作品では、乱暴な解釈になるが、放射能を「ホーシヤノー」と片仮名で表記していることに注目したい。

福島第一原子力発電所の事故による「ホーシヤノー」は、太平洋沿岸及び内陸部にまで拡散し、多くの人が避難した。被曝量によってはガンにかかる可能性の高い「ホーシヤノー」は、特に小さな子供を抱えた家族にとっては脅威であり、人々は「ホーシヤノー」を危惧して、生活の地を捨てざる得ない状況になった。また、「ホーシヤノー」汚染廃棄物処理といった現実的な問題は、作中、「なんでみんなのために考えられねえんだ」と嘆いても、「太平洋戦争の後のこの国は、「人権」の国になった」ことで一時保管場所の設置でも多くの自治体から拒否されたことを書き記す。このように誰からも忌避される「ホーシヤノー」汚染廃棄物を一手に自分の地所に集めた父親は、「ホーシヤノー」のお陰で、最後まで生きがいを持って生きられた」と母の火葬後に息子に話す。

父親が、社会、世間で言う危険な放射能汚染の廃棄物を「大丈夫、大丈夫」と言って憚らずに自分の地所に引き受けたいことは、社会、世間の「ホーシヤノー」喧噪とは一線を画し、大事なことは、忌避すべき「ホーシヤノー」ではあるものの、現実をしっかりと受け入れて考えるべき問題だとする作者の意図を感じる。つまり、作中には、福島第一原子力発電所の事故がもたらした様々な放射能問題が散りばめられており、この「ホーシヤノー」問題は、福島といったひとつの特定された地域の問題ではなく、日本人いや世界の人々が考えるべき問題だとも読める。誰からも忌避された「ホーシヤノー」汚染廃棄物の塊の山は、父親の茶毘の後、「光の山」と化し、「紫のオーラ」を出しながら「透明で、清らかで、気高くて、しかも毒々しい」極楽浄土に導かれる信仰の対象としての「放射能」と表記され、「放射能」を浴びるために外国人を含め、多くの人が訪れ、多くの人の目を引く場所に変容するという寓話性の中に、単に危険さわ

まらない物質として、〈ホーシヤノー〉を感覚的に忌避するべきものではなく、私たちはきちんと〈放射能〉問題に向き合うことが大切ではないのだろうかというメッセージにもとれるということである。

「桃太郎のユウウツ」(平二八・四 『文學界』)は、主人公が佐藤桃太郎であり、先祖は、明治の中期に巖谷小波が「日本昔話」をまとめたことで広まったというあの桃太郎伝説の爺さん婆さんであるという。昔話のとおり桃から生まれた桃太郎の話をはじめ、様々な桃太郎伝説の逸話を挿入して、先祖代々の桃太郎の生い立ちも示している。主人公の佐藤桃太郎は、子供が出来ずに悩んでいた佐藤清成と民江が、那須の雲巖寺境内で拾った捨て子と設定される、これも寓話性の強い作品である。

震災が起こつて除染作業の班長として毎日地道に働く桃太郎だが、桃太郎を管理する得体の知らない桃太郎機関のようなどころから届く第二の指令を気にしながら生活をし、何をしても常に〈ユウウツ〉で〈ウットーしい〉気分になる。その指令は〈鬼退治〉であろうことは想像できる。そしてついに以下のような指令が届く。〈佐藤桃太郎殿 二月十日午後二時半、いわきアリオスで小森氏を道連れに自爆テロを起こされたし〉という内容である。脱原発を唱える〈小森〉を殺すという設定から、桃太郎は自身の行動原理、美学と相対して悩む。しかし、桃太郎は、〈自爆テロという過激な手段〉は結局、脱原発の勢いがつく可能性があると大義を見いだし、意を決し、綿密な計画を練り、実行に移す。この時〈本当の鬼はこの指令を出している当人ではないか〉と思ひ当り、腰に爆弾を巻いたままの〈桃太郎の心〉は、自分が全身で抱きしめている小森氏への一方的な好意が澎湃として起こりつつあった〉なか、爆発までのカウントダウンで物語は終える。

この作品の脱原発を唱える〈小森〉とは、小泉純一郎元首相である。実際、二〇一六年二月一〇日に「いわき九条の会」が、小泉純一郎元首相を招き、「いわきアリオス」で脱原発等の講演会を実施しており、この会の発起人の一人として作者、玄侑宗久自身も名を連ねている。そのことを作品に挿入している意味では、原発再稼働に積極的な現政権に対し、脱原発の立場を宣言した作品とも言える。勸善懲惡という本来の桃太郎の美学から考えれば、本当に退治をしなければならぬ世の中の悪は、原発再稼働を推進し、経済向上を促そうとする〈得体の知れない桃太郎機関〉を抱える

政府機関が〈鬼〉であり、悪の根源ということになる。

次に、和合亮一の「詩の磔」(平二三・六 徳間書店)を見てみる。

この作品は、震災で津波被害に遭い、福島第一原発爆発事故で避難勧告が出た地域に居住し続けていた作者が、メルやツイッター等で現状を発信した内容を再録して構成されている。〈磔〉には、〈詩〉を編み出す慎りの言葉そのものを指すだけではなく、〈闇夜の磔〉の意味もあると想像できる。つまり、どこからともなく突然と襲ってくる恐怖と不安は、〈磔〉・地震・放射能そのものとも言える。

「詩の磔」は、まだ詩にもならない言葉〈磔〉が、作者の感情とともに一気にほとばしる。発信する時間帯が、ほとんど闇夜に近い時間であり、この悲惨な状況は、光りを閉ざされた闇夜と同様と想定し、〈明けない夜は無い〉と信じて、余震と放射能汚染という現実をしつかりと認識し、その場から〈私は震災の福島を、言葉で埋め尽くしてやる。コンドハ負ケネエゾ〉と発信続けた約一ヶ月間の記録である。

〈フクシマ〉は一晩で、世界に広まった、むしろチャンスだと思う、と地元のある番組で言っていたことに対し、和合は、捨てることのできない〈ここには家族と故郷があるんだよ〉と言い、原子力発電所の爆発事故で放射能が飛散し〈世界に広まった〉意味での〈フクシマ〉を否定的にとらえる。〈ここ〉は〈家族と故郷〉のある福島であり、〈フクシマ〉ではないと言う。この作品で唯一、福島が〈フクシマ〉とカタカナで表記される場所である。これは、チェルノブイリと同じように放射能汚染に塗れて〈世界に広まった〉日本の一地方の悲惨な地域というグローバルな意味での〈フクシマ〉ではない。また、この〈フクシマ〉という言葉には、何か特別な属性として、他と差別した意味も込められているような気がする。〈私たちはここに生まれた。福島を私たちが信じなければ、誰が信じる〉と言い、〈故郷を捨てちゃいけない〉、〈福島を捨てるな〉と言う和合からは、〈福島〉は、家族も住む故郷であって、人も住めないという放射能汚染地域の別称〈フクシマ〉ではないと強く発信されていると思われる。

〈フクシマ〉は、和合にしてみれば、故郷福島とは結び付かない異質の馴染みのない言語感覚である。だから逆に、放射能汚染によって誰も住むことができなくなった異空間の〈ふるさと〉を放射能の雨が降る〈フルサト〉と怒りを込

めて表象する。放射能は、〈幽霊〉とも表記され、作品の後半部分では〈原子力が私の家の扉のチャイムを押しした。〉と「なたですか」。話があります。「私にはありません」。とにかく扉を開けて下さい。「開けるもんか。」と原子力に対する憤りが示される。原子力発電機についての絶対安全という神話については、ある程度の信頼を寄せていたものの、福島第一原子力発電所の事故によって全てを失った今、〈絶対〉は信じないが〈絶対に生きる〉と強い意志を示し、捨てざる得ない〈故郷〉は、〈フルサト〉という表現に異化される。

また、故郷から離れなければならなかった人びとへの風評被害に〈私たちは噂話の中を、追われている、息を殺して嵐の中を、追われている、不条理な日本〉と憤怒を込めて発信した記録でもある。

「五年」は、和合亮一が平成二十八年四月に『文學界』に発表したもので、十数編の詩で構成されている。「火の柱よ」は、〈あらゆるものが海の中の火炎に奪われてしまった あの日から 残酷な静けさはいつも未明の沖に集まる 太陽は そこにいつも〉と〈夜明け〉を待つ思いが詠われる。「ザッツオール」は〈闇の中〉から人恋しくて来る〈誰かが〉いて、「どこへ」は、津波によって多くの〈長い影〉が〈雲の間〉に運ばれ、「空き部屋」からは、無人の静けさの寂寥感が漂う。「ある日」や「圏外へ」、「十二本」、「二時間」、「夢」、「星に」は、福島第一原発事故によって誰もいなくなった故郷の姿を静かに憤怒を言葉に込めて作者は詠う。

「詩の礫」から一転して、五年という年月がそうさせたのか、あの激しい日常的な憤りの言葉からこの作品には静謐とも言える磨かれた言葉に転化し、和合亮一の、犠牲になった人々への鎮魂と大切なものを失った人々の心の清閑さと故郷、福島をいたわるような想いが伝わってくる。

「ふと猫の目の光に振り返り」(平二八・一一 『文藝』)は、福島で「未来の祀りふくしま」というイベントを重ねてきた内容の紹介を兼ねた和合亮一のエッセイである。その中には、例えば、民族学者の赤坂憲雄の〈震災以来、私たちの感性は新しいアニミズムのようなものに回帰しているのか〉ではないか〉それは、〈日本人の感覚の故郷のようなもの〉だということや、姜尚中の話からは熊本震災と合わせて、〈郷土に思いを馳せることと四季への感受性を取り戻すこととのつながり〉の大切さを感じたと記す。共に郷土、故郷と言った観点で話し合っていることが読み取れる。

「福島第一原発廃炉図鑑」をまとめた開沼博と批評家の若松英輔のトークイベントからは、(福島)の状況を大げさに伝えようとすると、例えば脱原発や放射線被ばく回避の主張が正当化されていき、そこから歪んだ論理や差別が生まれ(る)という警告を感じている。福島に住む作家、玄侑宗久に(故郷とは一言で言うとか)と尋ねた際、(それは何かに夢中になる忘我の感覚に似ている。理由など抜きで、すっかり我を忘れてしまうことだ)と即答されたことに、和合は、一瞬にしてある帰着点を感じたという。

このエッセイから「未来の祀りふくしま」というイベントに込められている和合の意識がくみ取れる。失った、失いつつある(フルサト)というものをどのように取り戻すのか、これからあるべき(ふくしま)の未来を(祀り)という概念、観点から探っていくこととする意図である。(祀り)は、そこに住む人々の歴史によつて支えられてきた(ふるさと)を代表する文化である。(故郷)の象徴または表象が(祀り)だとすると、被災や放射能汚染で避難をして故郷を離れた人々にどのように(祀り)をアピールするのかを模索する和合の真摯な姿勢が見える。

VIII

木村朗子は、「五年後の震災後文学論」(平二八・四 『新潮』)で、数多くの参考例を示しながら、技術先進国の日本で原発事故が起きたことは、(以後、原発事故というのは、いつどこでも起こり得る事故だということになった)と述べ、今後、文学は、アレクシエーヴィッチの「チエルノブイリの祈り」やメヒテルト・ボルマンの「希望のかたわれ」のように(事故の原因に向かうのではなく、人生の中途に思わぬ方向転換を余儀なくされた人びとの暮らし)の方向になると言う。そして、広島や長崎の原子爆弾による原爆症の問題や多和田葉子、林京子や井伏鱒二の作品から(当たり前のことだが、生の危うさは、生き残った者にこそ問われるものとなる。被曝者にとって、生き残るとは、他者の死を目の当たりにしながら、死の恐怖におびえながらも生き続けることであつた。その意味において、ようやくヒロシマ、ナガサキは、フクシマに接続するものとなる)と言う。

東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故から七年目を迎える現在において、文学の方向は、木村朗子と言う（人生の中途に思わぬ方向転換を余儀なくされた人びとの暮らし）を描くようになることは想像できる。他に、吉村昭の「三陸沿岸大津波」、大江健三郎の「ヒロシマ・ノート」のような記録文学といった作品や、記録に徹して書き上げられた井伏鱒二の「黒い雨」や戦後に生まれ、広島取材をして書き上げた田口ランディの「被爆のマリア」のような作品も一つの方向性としてあげられる。社会の実情を踏まえ、その後を見通した真山仁や若杉冽の作品のように（事故の原因）の可能性を探り、警鐘を鳴らす作品もあり得る。これまで取り上げた数編の作品から分かるように、核、原発問題は、それぞれの時代に様々なたちで表出されてきた。東日本大震災における津波被災者の問題や福島第一原子力発電所の爆発事故における放射能問題も、原爆文学の世代間における作家の取りいれ方や独自の視点と立脚点の相違があるように、時代とともに変容すると思われる。

ただ、（ヒロシマ、ナガサキからフクシマへ）という問題は、木村の言うように一概に同列とは言い難い。文学の可能性について、福島の問題が（人生の中途に思わぬ方向転換を余儀なくされた人びとの暮らし）といった方向に行くことで「チェルノブイリの祈り」と同軸に置くことが出来るかも知れないが、被曝、原爆症といった問題を抱えた（ヒロシマ、ナガサキ）とは一線を画するものと思われる。

「フクシマ」の問題は、核の威力を知るために科学的実験として広島や長崎に投下された原子爆弾の惨劇とは異なる。広島、長崎の惨劇には、戦争という背景があり、無慈悲な国家戦略があった。「フクシマ」の問題は、J. サミュエル・ウォーカーが「スリーマイルアイランド」（訳西堂紀一郎 ERC出版 平一八・八）で顕したように核の危険性を（平和的福祉を増進する）といった国家経済戦力にすり替えて、原子力の開発を推進した結果、スリーマイル島やチェルノブイリ原子力発電所で原子炉から放射能が拡散するという思いも寄らない事故が起こったことと同じである。その結果、日常生活の地を捨て、住み慣れた故郷から離れざるを得ない人々の悲痛な悲しみと憤りを生むことになったことと同じである。放射能の問題は、柳広司が「黒塚」に描いた（鬼婆）恐怖と同じであり、福島在住の作家、玄侑宗久も（ホーシヤノ）こそが問題だというメッセージを「光の山」で発信した。和合亮一は、故郷、福島を愛する詩人であ

るがゆえに〈ホーシャノー〉によって穢され、誰もいなくなった、人も住めない異空間となった故郷を〈フルサト〉と怒りを込めて表象した。〈フクシマ〉という言葉は、何か特別な属性として社会から差別するものであり、玄侑宗久や和合亮一や福島で生活をしている人々や福島を故郷としている人々にとっては、故郷、福島・ふくしまは、〈フクシマ〉ではない。

福島第一原子力発電所の事故は、核爆発の驚異的な熱エネルギーを利用し、地球環境の保守や経済の活性化を狙うといった未来への理想的な核エネルギーの〈平和的福祉を増進する〉利用への転換によって生じた〈ヒューマンエラー〉である。敢えて、福島を〈フクシマ〉ととらえるなら、大気に飛散した〈ホーシャノー〉が、人々の生活を脅かし、未来への展望も挫くという意味において、〈フクシマ〉は、核や原子エネルギーの未来に向けた科学のあり方に警鐘を示す歴史的な地であると言える。

※本稿は、二〇一七年一月二十八日に行われた東洋大学東洋学研究所主催の公開講演会での口頭発表の一部に加筆訂正をしたものである。研究代表者である東洋大学の山崎甲一氏に御礼申し上げる。